
Bar ~ Grief & Cocktails ~

哀川ジュン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Bar's Grief & Cocktails

【Zコード】

Z2304D

【作者名】

哀川ジュン

【あらすじ】

いつものBar、いつもの席、いつものマスターの笑顔。そんな「行き着けのBar」で起こる日常的で何気ない出来事を綴る。酒好きの、酒好きによる、酒好きのための連載短編集。

第1話 似非紅茶に騙されて…

冬の足音がすぐそこまで来ている。

既に「コートやジャケットなどを羽織らないとこの時間は辛いほどだ。

夕暮れ時・・・」の時間帯を「逢魔刻」

なんて言つらしい。確かにこんな寒い薄暮時は何か出てきそうな雰囲気だ。でも実際そんなのに遭遇したことはないが。

私はブーツを履いた足を震わせながら、いつものバーの扉を開く。ここは季節を問わず私を暖かくも涼しくも迎え入れてくれる場所だ。

少し大きめに着込んでいたトレンチコートを脱いでいつもの場所に腰を下ろすと、マスターがいつもの笑顔を見せてくれる…。「いつも通り」が詰まつた「行きつけの店」というのは安心できるばかりではなくて、何か嬉しさが沸いてくる。

「寒くなつてきましたねえ」

「外の木枯らしは凄いですよ。なんか身体を芯から暖めたいな」

「何か温かいものでも創りましょうか?」

温かいもの…定番で行けばホットウイスキーとか、アイリッシュ・ショーコーヒーとかだろうか。しかし今はそういう気分じゃない。アルコールで芯から暖かくなりたいのだ。

「うーん、じゃあアースクエイクで」

「おっ、また凄いの行きますねえ。酒で身体を暖める寸法ですか？」

：さすがマスターには見抜かれてるようだ。

アースクエイクとは、ドライジンとウイスキーとアブサンを使ったアルコール度数の強いカクテル。お酒が弱い人とかにはあまりお勧め出来ないものだ。アブサンの代わりによくペルノーを用いたりもする。

材料の頭を取つて、「アブ・ジン・スキ」なんて呼んだりもするらしいのだが、私はそんな風にいう人は見たことがない。

「地震」を意味する名称どおり、飲めば「震え上がる」程の刺激があるのだ。

一口飲んでから、メンソールに火をつけた。

ここでの一服が、また良い感じに身体を暖める。

「いらっしゃいませ」

カラランという入り口の鈴の音に反射的に振り向くと、見慣れない男性が一人入ってきた。多分一見の客だろう。

「あー、寒い寒い！…ビールね、生！」

男は腰掛けるなり、大声で言う。なんともバーには場違いな客だ。マスターも顔では笑っているが、心の中では絶対黒いものが渦巻いているのだろう。

「あれ、オネーチャン一人？」

男がビールを飲みながらこちらをいやらしそうな視線で見てきた。

私は無視するわけにもいがずに、「クンと首を縦に振る。

「へー、一人でバーなんてカッコいいねえ。何飲んでんの？？」

非常に大きな声で私に絡んでくる。

どうやらどこかでしこたま飲んできているようだ。

この辺りは少し歩くと、居酒屋やスナックが立ち並んでいる。こんなに酔っ払っている客はBarには断然不釣合いだ。早く出て行つて欲しい…と思いながらも一応アースクエイクの説明をしてみる。きっと男には「馬の耳に念佛」だろうけど。

「ふーん、なんかムズカシイな。でも詳しいんだねえ。

マスター、俺にも何かカッコいいやつ創つてよ」

男がわけのわからないオーダーをする頃、

私はアースクエイクを飲み干した。次は何にしようかと考えていると、また男が大きな声で話しかけてきた。

「なあなあ、俺さ、K市に住んでるんだよ。そいでしかも彼女募集中なわけ。一応ちゃんと仕事もしてるし…」

ナンパの積りだろうか？適当に相槌を打つてはみるが、いい加減ウザくなってきた。と、その時。

「お待たせしました」

マスターが男に「カッコいいやつ」を供したようだ。

それは… ああ、コレかあ。

私は見た瞬間にマスターの意図を理解していた。

「なんだこりゃあ。アイスティーじゃないか」

「いえ、カクテルですよ?」

「・・・なんかアルコール入ってるのかわからんねーな。

炭酸入り紅茶みたいで…」

男はそのカクテルを勢いよく飲み干した。私もマスターも笑いを堪えるのに精一杯だ。男はまたビールをオーダーする。

…20分後

男はふらふらに成りながらチェックを済ませると、千鳥足で店から出て行つた。

「ロングアイランダースティーやあんな勢いで飲めば、そりやあ酔いますよ」

「マスターも悪者ですねえ」

「いやいや、ああいつたＫＹ君は早々に追つ払わないとね」

ロングアイランダースティー… 名前の割には紅茶を言つて氣も使わないカクテルだけど、見た目も味もアイスティーにそつくりなのだ。しかしへン、ウォッカ、テキーラ、ラムと4つのスピリッツを全て使うために、結構な度数になる。飲み易いからと言つてガブガブ飲むのはご法度のカクテルだ。あのような明らかに場違いな者には、丁度良い「お灸」だったかもしれない。

いつものバー、いつもの席、いつものマスターの笑顔
そしてそこで起るいくつもの出来事…。
きっとそこが酒場だからこそ、とりわけバーだからこそ

何気ない出来事ですら面白く思え、心も身体も暖かくなるのかもしね。

第2話 「はじめて」の雰囲気

「お疲れ様」

年末に近づくにつれてポツポツと催される「忘年会」。今年も会社の忘年会はいつも通りのチェーン居酒屋にて催された。

美味しいとは言えない銘柄のビールに、詐欺のように薄いチューハイやカクテル。そして揚げてからかなり時間が経つたであろうと思われる揚げ物群に、新鮮味のかけらも無い刺身。

チェーン居酒屋の安い宴会料理とは、

どこもこんなものなのだろうか。

「飲み放題で飲めて、適当に食べられればいい」なんていう魂胆が丸判りだ。

まあ忘年会なんて、そういう雰囲気が基本形であろうけど。

やつと不味い酒と不味い料理から開放されたのは21時頃だった。明日は休みだし、まだ飲み足りていない。

とは言うものの、飲み放題の基を取るべく

ビールはジョッキに5杯飲んで、

日本酒もいい具合に空けてきたのだが。

その飲みっぷりに男性社員どもは圧倒されていたようだが、心の底では酔い潰れるのを期待していたと思う。飲み会で「アフター」を期待する男性ってのは、結構居たりするものだ。

結局私に関してはそんな心配は無いのだが。

私の足は自然にいつもBarの方向へ向いていた。

ここからなら5分も歩けば着く。

酒を飲むことが判っていたから、朝会社へ行くときも自分の車を使わずに、妹を叩き起にして送つてもらつたのだ。

だからどれだけ飲んでも構わない。

寒空の下歩き始めると、後ろから誰かが着いてきているような気配がした。

振り向くと一つ下の後輩、典子が居た。

「先輩、どこか行くんですかあ？」

「家とは逆の方向に歩いてるし…」

「あ、うん。もうちょっと飲みたいなあ～なんて」

「私ももうちょっと飲みたいんですよ、連れて行ってください」

典子は笑顔を浮かべて私の横まで小走りでやつてきた。
見方によつては高校生くらいにも見える幼い顔立ちが印象的で、たまに何人かで飲みに行くと、必ずと言つてよいほど身分証明書の提示を求められる。

「いいけど、早く帰らなくともいいの？お家の人が心配するよ？」

「もう、小学生じゃないんだからあ！」

「アハハ、分かったわよ。じゃあ5分くらい歩くよ」

ふぐの様に頬を膨らましている典子を促して、

私はBarへ向かつて歩き出した。

ここ辺一帯は居酒屋とスナックが軒を連ねてゐる。

駅に近い事もあってか、この辺りにしては多少は栄えているといふだ。

だが夜は酔っ払いばかりで治安が良いわけではないので、

私達は足早にBarを目指した。

「ええ、私居酒屋とかに行くかと思つてたら、
「バーって、バーですか？」

「そうそう。私の行きつけの店」

「わー、私バーって初めてなんです。なんか緊張するかも」

「いらっしゃいませ」

扉を開くと、いつも通りジャズとマスターの声が出迎えてくれる。
私は典子をつれていつの席に座る。他にお客は一人いた。
良く見る常連の加代さんだ。彼女も私と同じクチで、
Barで飲むことを何よりも楽しみにしている若い女性だ。

「あ、今晚は。今日は可愛い娘連れてるわね」

加代さんがタンブラーを傾けながら声をかけてきた。
手に入っている小さなタトゥーが光つて印象的だ。

「うん、職場の後輩なの」

「」こんばんは

典子は私の後ろで小さくなりながら、細々とした声で挨拶した。
元々結構人見知りする方だが、今日は時に酷い。

Barということもあってだらつか。

「今日は、どこかで飲んできたんですか？」はい、どうぞ

「ちょっと会社の忘年会で。居酒屋の不味い酒

沢山飲んじやつたから、お口直しに…」

マスターがお絞りを差し出しながら、鋭く推測してきた。
おそらく微かな息の匂いや、服についている

匂いから嗅ぎ当てたのだろう。いつもながら恐ろしい洞察力だ。

以前餃子を食べた後店に行つたときなど、

ボロクソに言われたものだ。

そして口の中を消毒しようと、ビーフフィーターをショットで一気に飲ませられた。

「今日は、何に致しましょうか?」

「うーん、ちょっとスッキリしたいからまずジン・ファイズ

「はい、かしこまりました。…お連れさんは?」

「…あ、私ですか?え、…えーと、カクテルを」

典子はいきなりオーダーを聞かれ、焦っているようだ。

「アンタねえ、カクテルって言つたって星の数ほど在るのよ
「ええ、でも分からないんですよ、こいついう所初めてだから…」

カウンターの向こうでジンの瓶を取り出していたマスターが急にこっちを向いて、クスッと笑つた。

「そんなに緊張しなくてもいいですよ。Barだからって変に氣を使う方が多いんですけど、Barも結局は大衆的な飲み屋なんですから。飲みたいお酒のイメージを言つてくだされば大丈夫ですよ。

甘いのとか、辛いのとか、色が綺麗だとか

「は、はい。じゃあ甘くて、そんなに弱くなくて綺麗なのを…」

「かしこまりました」

マスターはそういうと、冷蔵庫から銀色の装置を取り出した。それは紛れも無く「エスプレマ・マシン」。

カクテルの材料の一部を泡にする機械なのだ。

これを用いたものを「エスプレマカクテル」と言い、泡と液体、両方の食感を味わえるカクテルとなる。中々これが出来る店は少なく、創始者はG県のとあるBarのバーテンダーだという。

「あ、エスプレマだ！ズルイ、私も欲しいなあ」

「スマセソ、これで今日の泡は終わりなんですよ。さつき加代さんにもお出ししちゃつたから・・・」

「ええー、ショック」

私は腹いせにジン・フィーズを半分くらい一気に煽った。典子はと言つて、シェイカーを扱うマスターを興味津々といった眼差しで見てゐる。やがてマスターは完成したグラスを典子の前に差し出した。

「わあ、綺麗」

「サイドカーといふブランデーベースのカクテルに、巨峰のリキュールとジュースを合わせた泡を乗せたものです」

サイドカーのオレンジ色と巨峰の泡の、紫のコントラストが綺麗に仕上がつている。

いつもながらエスプレマカクテルは、見た目も楽しめるものだ。

「美味しい！こんなに美味しいお酒はじめてかも」

典子は一口飲むと、恍惚の表情を浮かべた。

「ね、典子、私にも一口・・・」

「え、ダメですよ。これは私だけのもの」

「ケチ、ちょっとだけでいいから……」

「しようがないなあ……」

私は半ば強引に典子からグラスを奪うと、泡と液体のなるべく中間を飲むように一口飲んでみた。

・・・サイドカーの少し強い味と、巨峰の泡のクリーミーで甘い味が見事に調和している。

こういった味が重なると互いが自己主張しあってしまいがちだが、このカクテルはそれが全く無い。

「冗談抜きで、単なる酒ではなく芸術品の粹ではないだろうか。私はあまりに感動して、しばらくボートをしてしまっていた。

「先輩、そろそろ返してくださいよつー」

その声で私は我にかえつて、典子にグラスを返す。

「マスター、久々に感動しちゃったかも。これ、凄い」「いやいや、そんな大げさな」

「いや、マジで。見た目、味、フレーバーディをとっても、私が今まで飲んできたカクテルの中で3本の指に確実に入るかも」

私がまだ少しボートとした目でマスターを見つめると、マスターはグラスを拭く手を止めた。

「Barってのは、堅苦しいイメージがどうも拭えないらしいのですよ。

だから中々Barの敷居は高く思われるみたいなんです。でもね、一度入ってしまえばこういったアットホームな雰囲気の中で色んなお酒が楽しめるんです。

「お酒を楽しんでもらう」ために、見た目、味、雰囲気を最大限にカクテルとしてお客様に提供するのが私の仕事ですからね。初めてBarにいらした方も、楽しんでいただけるようなカクテルを創るところがね

「じ、自分でアットホームとか言っちゃってるよ」

端の席から加代さんの笑い声が飛んだといふと、マスターの話は途切れた。

「…折角いい事言つたつもりなのに」

マスターは不貞腐れたような顔をして、またグラスを拭き始めた。
典子も私も大笑いをしながら、
加代さんと改めてグラスを重ねたのだった。

第3話 究極のドラマティック

「とうとうひらひら始めたよ」

「ついに降つてきましたか。今日は特に寒かったから…」

私は肩と頭に少しだけかぶつてしまつた雪を入り口で掃つて、コートを脱いだ。

外はこの冬一番の冷え込みで、今年の初雪だ。例年と比べると少し遅めの初雪かもしれない。
しかし道路の凍結とか、雪かきとかを考えたら少しでも降つては欲しいものだ。

「既に屋根はスノースタイルですか？」

「…分かる人にしか絶対笑えない駄洒落だよね、それ。ちょっと暖房もつと上げて！」

「いや、そういう積りじゃないですよ?」

マスターはバツが悪そうに私にお絞りを渡すと、本当に暖房の温度を上げた。

本来Barの空調は、暑過ぎず寒過ぎずが基本である。酒を飲むに当たつてもそうだが、

酒自体の品質管理にもその方が適しているわけだ。しかし保存が難しい品質の酒は、夏でも

冬でも冷蔵庫や冷凍庫にいれておくべきであるけど。

「今日はどうしましょう?」

お決まりのオーダーを取るセリフが飛び。

「そうだなあ・・・折角雪が降つてゐし...」

「スノースタイルのですか?」

「いや、それはもういいから

いつになくマスターは親父ギャグっぽいのを連呼してくる。

何か飲んで酔つているのだろうか。それともどこかで頭でもぶつけたのか。

そんなマスターを尻目に、「冬っぽいカクテル」を考えてみた。

アラスカ、モスコミュール、ブラックルシアン、…いかにも寒そうな地域の名前ばかり。

雪国、マルガリータ、ソルティ・ドッグ … これじゃマスターの思う壺。

「じゃあ、マティーー」

「は？　はい。かしこまりました」

結局はいつも通りのチョイスになってしまった。あれだけ考えた挙句、

マティーーだったためにマスターも狼狽が隠せないようだ。
オーダーに困った時は、マティーーを頼むに限る。カクテルの王様とも

呼ばれているこのカクテルは、材料であるジンとベルモットの種類は勿論、

創る人によつても全く風味が違つてくるもので、いつ飲んでも飽きない。

「ええと、タンカレーとチンザノでしたね…あら…」

「え、どうしたの？」

マスターはチンザノの瓶を逆さにする。どうやらチンザノが品切れになつてしまつてゐるらしい。

「スマセン、在庫が切れてましてね。…ノイリー・プラットじやあダメですか？」

「えー、ノイリー？」

私はチンザノのかすかな甘みとタンカレーのスッキリした辛さが調和したのが、一番シックリくるのだ。ノイリー・プラットだと辛口になりすぎて舌が痺れる感じになる。

「どうせ」マテイーーにするのなら、あまつにも極端に辛口は避けたい。
そつするくらいなら…

「じゃあマスター、タンカレーをショットで。あとそのチンザノの
瓶もここに置いて」

「え、タンカレーだけで？あ、まさか…」

マスターは怪訝そうな顔でショットグラスを出すと、タンカレーを
注いで、

チンザノの瓶と一緒に私の前に出した。これぞ、「究極のドライマ
テイーー」だ。

どうせノイリーを用いてそこまで辛口にするのなら、こいつにひっ
てしまつた方が

良かつたりする。飲み方は勿論、チンザノの瓶を眺めながらタンカ
レーのストレートを飲んで

マテイーーの味を想像するのだ。これをやる人はそんぞう居ないだ
ろう。特に私のような若い女が
やつているなんて、日本中探して何人居る事か…。
でも…

「いかがですか？」「ドライマテイーー」のお味は

「…うん、やっぱりどう味わってもタンカレー。やっぱりマテイー
ーはならないね」

「ハハハ、そうでしょう。私も実は一時期その飲み方にはまつてた
んですけどね、余程の

妄想力が無いと、マテイーーの味にはなりませんよ」

要するに、私にはまだこの究極のドライマテイーーを味わうには色々と未熟なのだろうか。

やはりそれなりの経験と年恰好が必要なのかもしれない。何か恥ず
かしさが沸いてきて、

私はショットグラスを一気に空けてしまった。

「やっぱり別なのにするかな…」

「じゃあ、スノースタイルの何かで宜しいですね？」

「いや、それはもういいから！・・・じゃあ冬っぽくオールセん

トニックのウインターライド」

「オン・ザ・ロックですね、雪っぽくフラッシュペダアイスで…」

「マスター、やっぱり酔つてるでしょ？」

楽しそうな話題（前）

「・・・で、久々に調理専門学校の同期だった子達と飲みに行つたんです」

「同窓会的なやつ？」

「同窓会つか、報告会みたいなものですよ。みんな大手の食品会社に行つたり

市の給食センターで働いたり、結構しっかりやってるな、って「ヒトミちゃんだつて店のオーナーじゃない。しっかりやってると思つけどね」

秋が深まってきたBarのアミューズは秋刀魚とかぼちゃのパイ。そして飲み物はアンバータイプのビール。まさに秋という感じだ。

「『』のパイ、なんで『』シンじやないの？」

「『』シンつて春の魚ですよ…？あ、もしかして「あれ」言いたかったんでしょ？」

「『』私これ嫌いなのよね～』」

「そんなんつもりで作ったんじゃないんですよ。ハロウィンのカボチャと、秋の旬の

秋刀魚をあしらつて、お洒落かなど」

アミューズとはいえ、さすが調理専門学校を卒業しているヒトミちゃんだけあって

お洒落で凝ったものをだしてくれる。やはり食も酒も「飲食する楽しみ」が無いと

駄目だ。『』のパイは別な意味での「楽しみ」もあるから面白いのだけど。

と並のもの、この間はトーストの上に硬く焼いた田玉焼きを乗せたもの、その前は

超厚切りベーコン。明らかに狙っているとしか思えなー。

そんなに空を飛ぶものがヒート!!ちやんは好きなんだろつか?

「やつやつ、食べる楽しみって言えば、市内の給食センターで働いてる子が、

献立考えるの大変だつて言つてましたよ」

「栄養士なの?」

「はい。栄養バランスだけじゃなくて、いかに食べる楽しみを引きられるかが
ネックだつて。給食も「食育」つて言つて、教育の一環らしいです」

たしかに給食に関しては最近色々問題が起きているようだ。
給食費未納問題や、それが影響しての献立の極端な簡素化。
また、「居酒屋風給食」「超ミスマッチ献立」など、常識では考えられない
献立も数多く存在するそつで、私が小中学生のころとは大違ひみた
いだ。

「で、私も色々考えてみたんですけどね。…それで美紀さん、お腹空いてます?」

「全然話のつながりないじやん。まあパスタくらい食べられるくらいの空腹かな」

「じゃあ、ちょっとだけ試してほしいのがあるんですけど

やつこつヒート!!ちやんは奥へ入つて行き、しづまくすると色々乗つたトレーを
持つて運んできた。

「なにこれ？牛乳…？ パスタ？ それに…？」

「はい、学校給食を参考に作った『大人の給食セット』です」

「じゃあもしかしてこれはパスタじゃなくて…？」

「はい、ソフト麺です」

『大人の給食セット』は、見た目は普通の学校給食に見える。しかしそれは本当に見た目だけで、恐ろしい「仕掛け」がしてあったのだ。

「へえ、ミルマークなんて懐かしいね… って、これカルーアじやん！」

「はい。大人の給食セットですから。ミルマークに似たものといえばカルーアでしょ」

さらにソフト麺のソースは辛目のカレーソース、サラダはゴルゴンゾーラを使ったシーザーサラダ。おあつらえ向きにレタスなどはしつかり茹でてある。そしてブランデーに漬けたラ・フランス。

「よくソフト麺なんか手に入ったね」

「最近はスーパーでも一般家庭用に販売しているんですよ。給食センターで働いてる子の

話聞いてたら、なんか懐かしくなっちゃって。正直私、給食の時間が憂鬱だったんです。

信じられないかもですけど、結構偏食だったし食べるの遅かったし。

だけど今振り返ると、なんか懐かしいからまた食べてみたいな、なんて思つたりして

「あ、それは分かるかも。私のお父さんが昔、『脱脂粉乳はまづかつたけど、いい思い出だ』とか言つてたことあるもん」

ところによればアリコーズに出でた秋刀魚とカボチャのパイも、この給食の理念から

ヒトミちゃんの頭に派生したいわゆる「食べる楽しみ」の一つなのだろうか。

確かにソフト麺なんて学校給食を食べなくなつてからお皿にかかるることは無い。

スーパーで販売されていたことすら知らなかつた。

現役で食べていた頃は伸びきつたパスタといつ感じでビジも好きにはなれなかつたが、

今食べてみると懐かしい味がして、不思議と美味しく感じる。

人間の味覚つて言つのは、こいつどいつも不思議だ。なにか「樂しみ」や「面白さ」

があれば、普段そつでもないものまで美味しい感じられてしまつ。

私がすっかり食べ終わつた頃には、ヒトミちゃんは既に店の片づけをしていた。

私も自分の食べた食器の洗い物を少し手伝い、ヒトミちゃんは店内の掃除をして

施錠をし、看板のライトを消すと、私と一緒にバックヤードへ入つた。

「さて、と。美味しいものを食べたすぐだけど、また美味しいもの貰おうかな?」

そうじつて私はヒトミちゃんの肩に手をかける。最近はいつもここでヒトミちゃんと

愛を確かめ合つてこる。ヒト//ちやんの部屋ですればいいのだが、最近はお互に

部屋まで待てないのだ。

軽い口付けの後一寸唇を離すと、今度は深い口付けを交わす。既に私の手はヒト//ちやんの服の中に入つており、ヒト//ちやんの息は次第に荒くなつていく。唇を離すとヒト//ちやんも私の胸に手を差し入れてくれる。それを念図に、私は手を下のほうへ持つてこゝと、ヒト//ちやんのスラックスに手をかける。

「…美紀さん」

「ん？ どうしたの…」

「…その…、なんでもないです」

「え？」

スラックスを下げるとい、ヒト//ちやんをますます快感の渦にのめり込ませていった。

「どうする？ 部屋でもう一回ある？」

一段落ついた後、テーブルの上で乱れた服も直さずにタバコ吸いながら寄り添つていた。

快感を得た後はあまり動きたくは無い。酒で酔つ以上の心地よさがそこにはある。

だが、今日は違つた。

「…美紀さん、ちょっとといいでですか？」

「うん？ なんかさつきからヒト//ちやんを変じやない？ なにかあつたの？」

「その、…もうこんなことやめませんか？普通の関係に、戻つたほうがいいかなって思つて」

私は一瞬、ヒト://ひやんが何を言つてこのか分からなかつた。

「え？ どういふこと？」

「どういふことって、そのままですよ。私は美紀さんが大好きです。だけどこのまま

こんな関係を続けてても、なんかダメな気がして。普通に男性と恋愛したほうが、

お互いのためなんじゃないかなって…」

「ちょっとまって。レズビアンが普通じゃないつて言つの？・ダメだつて言つの？」

「そうじゃないです。でも、日本では同性同士の結婚は出来ないでしょ？ それに世間からの風当たりも良くないし…。女人と付き合つている、なんて友達

とかの前で大っぴらには言えないですよ」

確かに今の日本では同性愛はタブー視される傾向にある。アニメや漫画などでは認知されているらしいが、現実となれば引かれるケースが多い。現に私も家族や同僚、友達に女性と付き合つているとかミングアウトしたことはない。でも決して恥ずかしいことだともいけない事だとも思つていない。もしバレたらその時はそれで構わないのだ。

「でもさ、好きな感情に男も女も関係ないじゃん。私はヒト://ひやん

んを愛してゐるんだし。

ヒトミちやんだっけ私を愛してゐるんじょ？

「やうだけど…。じやあ美紀さんは結婚願望はないんですか？」

「…結婚か。正直無いかな」

「…」

しばらくの間沈黙が流れた。聞こえるのは、マスターが遺していく時計の秒針だけ。

すっかり灰になつたタバコを灰皿でもみ消すと、私は起き上がりて下着と服を直し始めた。

本当はヒトミちやんをもう一回押し倒そうかと思つたが、さつきまで残つていた快感は

すっかり消し飛んでくる。「楽しみ」や「面白」が無ければ性行為も「まずく」なる

ものなのだ。つまり強姦は焦げきつたポテトと一緒に。

「じやあ今日はとつあえず帰るね。ヒトミちやんはやつぱり寝つても、私はヒトミちやんの」と、諦めないから

「…」

ヒトミちやんから返事は無かつた。軽くすすり泣く声を背に私はバックヤードの勝手口から

外へ出た。もしかしたらここから出るのも最後になるのかもしれない…。

眩しい看板が立ち並ぶスナック街は相変わらず酔っ払いの集団がノロノロ歩いている。

ヒトミちゃんと体を合わせているときは、ある意味非常な快樂を歩んでいる。

しかしここは冷たい日常。思わずスナックの看板が滲んで見える。なんとか抑えようとしても涙が止まらない。私はビルの陰に入つたところでしゃがみこんで

しまつた。今まで「フラれる」という経験は人生の中で一度もなかつた。

いや、正式にヒトミちゃんにフラれたわけじゃないけど。

少し落ち着くと近くのコンビニに入り、ウイスキーのポケットビンを買う。

ポケットビンを手に私は公園まで行くと、ベンチに座つてウイスキーを思いつきり

流し込んだ。ひどくまずい。安いバーポンだけど、こんなにまずいはずは無いのに。

まずく感じるだけかもしれない。自棄酒は美味しいはずが無い。でも、それでもしなければモヤモヤした気分が落ち着くはずも無かつた。

そんな飲み方をすれば酔いが回るのも当然で、すぐに目の前がグーグニヤしてきた。

それでも私はポケットビンを口に運ぶ。すっかり飲み干してしまつたところでベンチから

身体が落ちて地面に突っ伏した。ひどく眩暈がする。喉が恐ろしく渴いて、焼けそうに

熱い。

「・・・！」

誰かが呼んでいるらしいが、もはやほつきと聞こえない。

そのまま私の意識は遠のいていった。

楽しそと面白さ（後）

目が覚めると病院のベッドの上だった。

公園のベンチから崩れるように倒れた私は、通りがかりの男性が呼んでくれた

救急車に乗せられて救急病院に運び込まれたらしい。点滴を腕につながれて処置室で寝かされている私の横には父と妹がいた。

「全く急性アルコール中毒なんて。人様に迷惑かけるような飲み方するんじゃない」

「お姉ちゃん、どうせ馬鹿みたいに飲んでたんでしょう」

父と妹に責められ、立場上何も言い返せない私。

何も言わずにただ点滴の液体が落ちていくのを眺めていた。

そのうち当直と思われる医師が来て、今夜は病院で過ごし、朝には退院しても良いとの

ことだつた。

それから一日間、仕事に行く氣にもならずに家の自分の部屋に閉じこもつていた。

いつもならヒトツちゃんからメールが来るのだが、携帯電話は無言のまま。

三日目。

さすがに仕事も休めないので重い気分のまま出社する。

案の定仕事には身が入らない。モヤモヤしたものが消えないまま、一週間が過ぎた。

医者にもアルコールは控えめにと言っていたし、飲めるような気分でもなかつたから、

私にしては珍しく、一滴も飲んでいない。

会社と家を往復するだけの日々だ。毎日家で夕食を摂っているので、

父も妹も

不思議がっている。私としてもあんな醜態を晒してしまった以上、
しばらくは自重

しなければいけないと思っていた。

それから2週間後。既にヒトミちゃんと連絡を取らなくなつて三週間になる。

医者からは適量だったら飲んでも良いとは言われたものの、どうも身体が酒を欲しない。

食欲も減退している。それでも食べなければ身体に良くないため、無理に箸を動かして

いた。食卓には私と父だけ。

「そういうや美紀、今週の日曜日は家にいてくれよ」

「え、なんで？」

「紺が男を連れてくるんだと。婚約したそうだ」

「・・・へえ。もう随分付き合つてたみたいだけど、婚約したんだ」

「なんだ、そんなに前から付き合つてがあったのか

「大学の時からじゃない、確か」

「で、美紀はどうなんだ？」

父に痛いところをつかれて、箸を止める。

「色々忙しいからさ。それに今まで結婚して家を出ちやつたら、お父さん大変じやない」

「俺のことは気になくていいさ。そりゃあ婿養子にでもなつてくれれば一番いいけど、

そもそも言つてられないだろ？ 女の子が一人生れたところで、

俺は決心してたさ

翌日 の 帰り道。 街中の「コンビニ」で買 い 物を し て こ る と、 ふと 肩を 叩 かれた。

振り返るとヒトツヒヤンの姿が ある。

「あ・・・」

「 美紀さん、 なん か 久し ぶり です ね」

「う、うん」

「あの、 ちよつとだけいいですか? 話したいこと、 あるから」

「 … 話したい」と つて、 どうせ 別れよいつってこと でしょ? もう い い
から…」

「 セウジヤ ないん です! … サレ ジヤ なんだ か り・・・」

私 と ヒトツヒヤン は コンビニ を 出 る と、 私 の 車 で 人気 の ない 廃工場
の 隠 に 来 た。

しばら く の 間 一 人 は 無言 だつた が、 沈黙 を 破つた のは ヒトツヒヤン
だつた。

「 … 美紀さん。 実は 三田前 から お 店 を 休んでる ん です」

「え、 ど う し て … ?」

「そ の … 、 話すと 長く なる ん です が、 美紀さん に あん な」と 言つた
のも、 関係 して

る ん です。 私、 先月 から 強引 に プロポーズ され て た 人 が いて … 。

それで なん か
訳 が 分から なくなつちやつて、 美紀さん に 「あん な」と 言つちや
た ん です。

それで、 その 人が あまりに しつこ い から、「 女性 と 付き合つて る
つて、 つい

言つて。そしたら凄く引かれて、氣味悪がられて…」

私は何も言わずに助手席のヒトニアちゃんを抱きしめていた。

日曜日。

私とヒトニアちゃんは私の家のキッチンにいた。
せっかく妹が婚約者を連れてくるので、何か料理を作つてもうそ
うと思つたのだ。

「美紀さん、あとはスペイン風オムレツだけです」

「はーい。玉子残りあつたつけ?」

「3個あるから大丈夫ですよ」

たくさん料理を作るのは大変なので、ヒトニアさんが手助けに來てくれた。

普段Barで作つている料理をたくさん作ってくれてる。

「お義父さん、お義姉さん、よろしくお願ひします」

「まあまあ、竜也くん。そんなにかしこまらないでよ。ねえ、お父
さん」

「…君にお義父さんと呼ばれる筋合にはない…」

「…え?」

「ハハハ、言つてみたかっただけだよ。さあ乾杯しようか」

妹が連れてきた婚約者の竜也くんとは何回か会つてるので、和ん
だ雰囲氣で

迎えることが出来た。それも、ヒトニアちゃんが隣にいたから、かも
しない。

「今日の料理は、」ヒトミちゃんが作ってくれたんだよ

「へえ、美味しいですね~」

「じゃあ、いただきまーす」

いろんなものを乗せたカナッペ、ゴルゴンゾーラを使ったシーザーサラダ、鰹のカルパッチョ、ジャーキチキン、ヒトミちゃんの店に置いてあるハモン・セラーノそしてスペイン風オムレツ。

「マジ美味しいです。ヒトミちゃんを嫁にもうつ人は最高だろつなあ」「あら、私よりヒトミちゃんの方がお似合いみたいね」

妹はうすら笑顔を浮かべると、竜也くんの手の甲を思いつきつつなつた。

「いてて……、や、そういうんじゃないって」

「ダメだよ、竜也くん。ヒトミちゃんは私が……あ……」

「み、美紀さん」

思わず口を滑らせかけて、口を紡ぐ。ヒトミちゃんも私の脇腹を軽く小突いた。

「え、何?お姉ちゃん」

「な、なんでもないって。ヒトミちゃん、そろそろワイン開けよつか?」

「え、ええ、そうですね

「…なんか変なの」

ヒトミちゃんがお祝いごと店から持つてきてくれたワインで、すっ

かり気分よく

酔つてしまつた。やはり酒は楽しく面白く飲まなければ本当の美味しいは分らない。

沈んだ気持ちの時や、怒っている時に飲んでも少しも美味しい。むしろそんな時の酒は「酔うための道具」にすぎないのだ。ここ一ヶ月くらいでそんなことが身に沁みて分かった気がする。

女子会鍋論争

「...近年、インターネットや雑誌で話題とされている「女子会」。今日は私とヒトミちゃん、私の友人の早苗とBarの常連の加代さんで、女子会なるものを催すことにした。元々女子会とは「Sex and the city」の影響から、女同士でオシャレをして集まって食事をしたり飲んだりすることを、ブログやファッシュョン雑誌で「女子会」と言い出したところから、その名前が浸透して行つたそつだ。」

寒い日が続いているので、今日は鍋料理が有名な店を予約した。いかにも「ユーワーハーブ居酒屋」って感じの作りで、私たち以外にも女子会と思われる女性の集団や、カップルが多い。

「じゃ、第1回Grief & Cocktails女子会を記念して、乾杯！」
「でもさ、なんでBarでやんないの？」
「私が落ち着いて飲めないじゃないですか。だからわざわざ定休日の日曜にしてもうひつたわけだし」

全員生ビールのジョッキを持って、豪快に飲み出す。周りの女性をみれば「オシャレなカクテルなどを飲んでいる中で、私たちはそれぞれの前に灰皿ヒビールジョッキを置いている。
まあ、これも女子会ならではかも。合コンではとても出来やうにないスタイルだ。

「でも美紀さんが幹事なら、他のダイニングBarとかを選ぶかと思つたのに、なんで鍋専門店

なんですか？この小説なら絶対そうなると思つたのに」「ヒト://ちゃんも甘いわねー。「女子会＝オシャレ」の定義が私に通用すると思う？」

「ダイニングBarでオシャレなカクテル飲みながら、オシャレで美味しい料理なんて、ケータイ小説でやつてもつまんないでしょ？」

「美紀、相変わらずメタファイクション全開だね」

「何よ、早苗は鍋嫌いなわけ？キムチ鍋」

「とんでもない。大好きだつて。ただ、男の人の前ではちょっとね」

早苗にも一応「女の恥じらい」なるものがあるのだと、私は少しだけ感心してしまった。

男性の前でキムチ臭をばら蒔きたくない、という恥じらい…。

よく「焼肉を2人で食べている男女はただならぬ仲」と言つが、それは二三ニク料理やら

キムチ鍋といったものでも言えるのだろうか？

そんなことを考へてみると、注文したキムチ鍋が来た。周りをみれば、豆乳鍋だの

「ラーメン鍋を頼んでるが、私たちのテーブルはキムチ鍋。

「てっきり女子会つていつと豆乳鍋だとかそういうのを頼むかと思つてしましましたけど…」

「ヒト://ちゃんも甘いわねー。「女子会の鍋＝豆乳鍋」なんて…。

「はいはい、無限ループって怖いわねーそんへんでやめて、お鍋食べましょー！」

「チヨット待つた！」

いきなり加代さんが大きな声を出し、鍋に伸ばしかけていた早苗の箸を祓う。

「ど、どうしたんですか？」

「アンタ今鶏肉食べようとしたでしょ？ ダシが出るからまだダメ！ まず葉物から！」

「うわー、出たよ鍋奉行」

確かにキムチ鍋の場合、葉物をあまり入れておくと辛くなりすぎる場合がある。

「牡蠣は一通り食べてから入れましょ。固くなると美味しいくないから」

「はーい。鍋奉行さんに任せします。でも、なんか色々なべがあるんですね。」

豆乳鍋とか「フーラゲン鍋はもつ結構前からあるけど、最近はトマト鍋とかカレー鍋

ってのも人気が出てきてるらしいって。この店にもあるみたいですね」

「でも私はトマト鍋ってやだな。いかにも洋風ってのがさ」

「でも美紀、このキムチ鍋だって、元々は韓国のキムチチゲが元になってるわけじゃん。」

私はやっぱ醤油味の寄せ鍋か、みそ味のもつ鍋とか、そういう和風鍋が一番好きかな

「じゃあ早苗はキムチ鍋いらないのね？ 鶏肉は全部没収！」

「あー、泥棒！」

「だから鶏肉はまだ早い……」

じつじつたワイワイした雰囲気も、女子会とこりのだらつか。

まあ女性向け雑誌でよく書かれている女子会とこりのは「オシャレなワインBarで」とか

「美味しいカジュアルフレンチの店で」なんてのが多いから、鍋料理専門店でなんてのは

王道とは言えないだらけで、実際はチーン居酒屋とかで催すグループは多いと思う。

その方が手頃で気軽だし、多少騒いでも大丈夫だ。

一時間後。四人ともかなり飲み、鍋の中もほとんど食べてしまった。

「さて、ここからがホントのお楽しみですね」

「私、本当はこのために鍋を選んだといつ…。ここはじめのバリエーションも色々あるからね」

「これは鶏肉や牡蠣のダシが出ているから」

「いい雑炊になりそう」

「は？」

加代さんの言葉に、私ヒトニヤんと早苗は、思わずハモってしまった。

「え、雑炊だよ。最後に卵をかけ回して、三つ葉散らしてさ……」

「何言つてるんですか、加代さん。キムチ鍋つて言えばうどんじよ？キムチうどん」

「美紀こそなにいつてんの？中華めんでしょう？良いダシだから美味しいキムチラーメンができる」

「早苗さん、ラーメンはもつ鍋や石狩鍋のよつなみそ味でしょ？」

飯入れてチーズと塩胡椒入れた

リゾット風がいいですって」

「そんなフランスかぶれなものは却下！やはり雑炊がいいって！すいませーん！」

「雑炊セットね！」

「うどんうどん…」

「中華麺」

「チーズリゾットのセットお願ひします！」

「あ、あの…？」

それそれがてんでバラバラなオーダーをするので、店員のお姉さんはすっかり困つてしまつて
いる。最初から鍋の締めは揉めるんじゃないかと予想はしていたもの、ここまで意見が分かれる
とは思つていなかつた。

「えーっと、お決まりの頃にまた伺いますね

私たちのあまりの剣幕に、お姉さんは逃げ出して行つてしまつた。

「だから、雑炊にしようついで。一番王道じゃん！」

「うどんだつて王道だもん」

「ラーメンは譲れない！」

「・・・このままじや埒があきませんよ。幸いトロヒーターでいつ
でも温め直せるし、

もうちょっと飲みながら話しあわせませんか？一品料理とかも結構
あるみたいだし…」

「それで畠さんそんなに暗いわけね」「

三時間後。私たち四人はMALL HELLOに居た。

「結局飲んで食べながら鍋の締めの言い合いなんかしてたらお腹いっぱいになつて」

「本末転倒とは、まさにこのことですね」

私はモーレンジの炭酸割りを飲みながら、ため息をついた。
結局あれこれ言い合いながらビールだの焼酎だのを飲んで、一品料理をつづいていたせいでも

満腹になつてしまい、折角のスープを4人して無駄にしてしまった。

「でさー、神谷さんは鍋の締めって言つと何が好き?」「うどん?」「

「鍋の締めかあ。やつぱり・・・・・」

「雑炊だよね?」

「ラーメンつすよね?」

「いやいや、リゾットでしょ?」

「餅、かな?」

「餅? うつそー!」

「お餅は途中に入れるものじゃない?」

「締めじゃない!」

「なんか違いますよね」

「何言ってんだよ。俺の田舎ではいつも土手鍋で、最後は餅だつたんだ。

「そういえば誠くんは餃子が好きだと言つてたな…」

「マスターが? 信じらんない」

結局鍋の締めは、酒の好みと同様に人それぞれだ。

そのままの味で終わらせたいという人もいれば、手を加えて洋風にしたいという人もいる。

ここまで論争になるという鍋の締めは、もはや日本人にとって永遠の課題なのかもしれない。

「ところで次の女子会は？」

「あー、来月またあの店で。次はモツ鍋でリベンジするからね、早

苗

「モツ鍋なら中華麺ですよね！」

「ヒトミちゃん、みそ味だからこそ、雑炊でしょ！」

「加代さん、みそ味はうどんですって！」

「ラーメン、ラーメン！はい、多数決で決まり！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2304d/>

Bar ~ Grief & Cocktails ~

2011年10月4日15時57分発行